

単純ヘルペス脳炎の高齢発症例

庄司 紘史 聖マリア病院神経内科主幹・久留米大学名誉教授

単純ヘルペスウイルス（HSV）は初感染後長く三叉神経節などに潜伏感染の形で留まり成人あるいは高齢者で宿主要因により再燃による皮膚・神経系の感染を起こし得ます。1996年九州地区での単純ヘルペス脳炎（ヘルペス脳炎）を含む27例のHSV中枢神経感染症の調査では、20歳台、50歳台に好発年齢がみられますが、今回の20例の症例群では60歳台にピークを示し、89歳まで分布していました。2008年、HSV-1・2型の健常人418名の血清疫学的調査では、HSV-1型では男性で20歳台、40歳台、65歳以上の3相性のピークを、女性では30歳台、65歳以上の2つピークを示し、2型を含めHSVの65歳以上での初感染・再燃を示唆する陽性抗体保有率が高まっていることが報告されています。高齢化社会を反映した所見と思われれます。1990年代には、20歳台の初感染でのヘルペス脳炎はしばしば劇症経過を示していましたが、現在では免疫機序による傍腫瘍性脳炎・脳症に位置づけられる若年発症の辺縁系脳炎 / 脳症の増加に注目が集まっています。

ヘルペス脳炎の発症要因として、AIDSや臓器移植など免疫不全、脳外科手術などがあげられています。我々が経験した20例中7例の65歳以上の高齢ヘルペス脳炎では、アルコール性肝障害、脳梗塞後遺症、糖尿病、前立腺癌術後、口唇ヘルペス、喘息・ステロイド投与など多彩な基礎疾患・合併症が存在していました。これらの基礎疾患・合併症の存在はヘルペス脳炎の診断の遅れに繋がり、一方では、発症のリスク要因に絡む可能性があります。口唇ヘルペスは再燃を反映した指標になることが推定されます。

ヘルペス脳炎の高齢化を指摘致しました。高齢者のヘルペス脳炎では、複数の病態が重複しがちで、早期診断の遅れにも繋がりやすい点注意が必要です。

文献：

江島泰志、河野佳子、鈴木馨、庄司紘史、藤間昭勝：単純ヘルペス脳炎の高齢発症例の検討。神経内科、77：663-5, 2012.